

自己評価報告書(最終報告)

報告者

教員養成特別コース
／木下 光二

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ－1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

①教職大学院の教員として、現場で必要とされている教師の力量形成について、理論と実践の統合を図ることを目指す。
②一方向的な講義形式から脱却し、鳴門市や徳島県内外の学校、附属校園と連携を密にし、実際の授業参観やWEB上での相互交流を取り入れた授業を展開することで、学生の学習指導、子ども理解、学級経営などの力量形成を図る。
③学生の声を授業に反映させ絶えず授業改善に努めるとともに、授業のねらいや観点を明確にすることでより客観的な評価ができるようにする。

2. 点検・評価

新任教員に求められる理論と実践の統合を目指すために、附属小学校や附属幼稚園、県内の優れた授業や保育を参観し、実践に学ぶ試みを行った。参観した学生の様子から、子どもの思いや願い、豊かな授業イメージを持つ手段として効果的であった。また、参観だけににとどまらず、本年度は録画した授業映像を視聴しながら振り返りを行ったり、発話プロトコルを起こし分析したりする演習も取り入れた。教育現場の実践から学べる場の獲得や提供に努めたことは学生にとって有意義であった。

本年度はコース長になったことから、鳴門市の先生方との交流はより密接となった。大学教員としての仕事も4年目となり、文部科学省の中央協議会や幼稚園指導資料集の作成委員、北九州市や舞鶴市の連携推進協力員としての依頼はもとより、県内外の小学校や幼稚園からの講師や助言にも取り組んだ。長年の学校現場での経験を生かし、社会的要請に応えるために努力を続けている。幼児期から児童期にかけての子ども理解や教育方法の改善は、文部科学省の緊急を要する課題である。教員の力量形成にも今後、良い成果や知見が得られるものであるゆえ、意欲的に研究に取り組むことができた。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

①学生の相談への対応がスムーズに行えるように、emailを活用する。
②講義時間内に限らず、学生の質問や相談にいつでも気軽に応じることができるように努める。
③学生が主体的に授業に参加できるよう、討論、模擬授業を取り入れる。

2. 点検・評価

大学教員としての仕事も4年目となったこともあり、大学生や大学院生への理解や対応の仕方も理解でき、良い関係を構築できるようになった。授業の場のみならず、空いた時間をできるだけつくり、質問や相談等に応えられるようにした。また、本コースで作成したメーリングリストを活用しての学生指導も効果的であった。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

- ①学校教育におけるカリキュラム開発や授業開発に関する研究を積極的に行う。
- ②教育実践力の向上をめざす学生たちのための評価のあり方を検討する。
- ③小学校教育の授業理論と実践に関する研究を進め、学会等に参加する。
- ④幼稚園と小学校の合同活動や連携カリキュラムを開発するための研究を行う。
- ⑤映像教材(デジタルコンテンツ)を活用した教師教育の可能性を検討する。

2. 点検・評価

前述したように教員の力量形成に必要な研究に、個人や協同で取り組んだ。大学生や大学院生の模擬授業や実習授業、実際の教育現場での研究授業などから、求められている課題が明らかになりつつある。本学での講義や授業、県内外の各種研修会の助言や学会発表等でも生かせるように努力を続けた。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

部会議、専攻会議等での運営に参画し、その任務内容を推進する。

2. 点検・評価

本年度は、教職大学院教員養成特別コース及び学校教育実践コースのコース長として、連携協力校との会議や人材育成会議等に多数出席したり、専攻の運営にも積極的に参加したりし、授業やカリキュラム改善等に努めた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属校園の研究活動に積極的に参画し, 日常の教育活動から学ぶとともに, 研究授業や研究大会に積極的に参加する。
- ②教育研修, 教育事業の企画・運営を進んで行う。
- ③鳴門市の小学校を中心とした教育支援活動を積極的に行う。
- ④県内外の研修会や研究会にて, 教育研究の理論や実践知を積極的に伝達する。

2. 点検・評価

本年度, 附属校園は文部科学省委嘱による幼小接続カリキュラムの研究開発が開始され, 研究協力員として取り組んだ。出来る限り附属幼稚園, 附属小学校の保育授業研究会に足を運び, 研究の成果が出るように努力を続けた。また, 本学で夏に開催された教育文化フォーラムでは, 講演及びシンポジストとして登壇し, 鳴門市内の幼稚園や小学校に研究の成果を広く還元するように努めた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

本年度は, 教職大学院教員養成特別コース及び学校教育実践コースのコース長として, コース運営はもとより, 学内外の様々な会議に出席したり, 実際に運営を行ったりすることで, 本学に貢献に努めることができた。